

「家庭教育をどう展望するか」

- 夏休み、親子での体験の場を数多く作りましょう -

園長 高杉美稚子

文部科学省からの実例調査が発表されました。

これからの文は、平成12年6月号で掲載した内容ですが、この調査結果を見ながら、夏休みの前に今一度家庭教育について考えて頂きたいと、加筆の上再掲載いたします。新聞の記事を見ても、何かがゆらいできているという、漠然とした不安感があります。では、何をどうして言ったらいいのでしょうか。

幼稚園教育では、心の教育を第一に考えながら、集団教育の中での一人一人の子どもの育ちの姿をどう導いていったらいいのか、昼夜を問わず、模索しています。可能な限り、子ども達の望ましい発達の為の人的、物的教育環境を整えているつもりです。でも、やはり、根本にあり、最も大切で、私たちが手の届かない範囲、それは、家庭教育であろうと思います。

家庭教育で何が変わってきたかと言いますと、最近の子ども達のままごとを見て感じることは、掃除、洗濯、調理の場面が減って、食事の場面と、電子レンジでチンする場面、電話をかける場面、おめかしして出かける場面が増えていることです。

家事労働の時間は15年くらい前に比べると、断然と減ってきているのでしょうか。その分、親子での体を使った家事労働の共同作業の時間も減り、その結果、子どもへの対応を言葉だけでしようとして、言葉だけでは気持ちを押し量れなくなって、親子共々、精神的に疲れ果て、子育てが辛くなってきたのではないのでしょうか。

最近の調査で、母親は結婚するまで、自由だった時間、行動、お金が制約され自分の人生を振り返った時、孤独に陥り、父親は、仕事上ストレスが多いので、家庭ではせめてリラックスしたいと考えているのに、子どもへの対応を迫られ、子どもと向き合わずに、子どものみかけの理解者となって、母親をますます、育児ノイローゼへと向かわせているといわれています。

この育児不安が、過保護や過干渉へと更に向かわせています。更に虐待にも繋がっています。又、昔の子どもは、叱られる事が予期出来ていたのに、育児不安の親からは、いつ、叱られたり、罵倒されたりするのかわからないので、子どもも不安で怯えていて、子ども自身が不安で、すぐ、切れる子どもになるとなるといわれています。

親子の対話、それも、体を使った対話をする事が、今、とても大事だと私は考えています。命を大切に作る心も、ものを大切にすることも、言葉だけでは実感する事ができない事を、心で感じ、体で覚えていく事が大切だと思います。頭で理解できていても、心で感じ、体で覚えていかなくては、本当に理解している事にはならないからです。頭の中の考えと体の感じが一体化していないという事は真の理解には至っていない事と同じだと思います。

今、大切な事は、子どもと向き合って、一生懸命家庭教育をしてほしいということです。それは、当然のごとくお金で教育を与えたり、物質的に豊かにしてあげるとい事ではありません。

ん。この不景気の中で、お金では買えない喜びがあります。幼稚園の自然観察園で収穫したものは、嫌いなものでも、好んで食べるという現実があります。

又、悲しいことに、子どもを取り巻く「三つの間」が減ってきているということです。

「時間・空間・仲間」の三つの間が減ってきているのです。その結果として、体験するということが極端に減っています。子ども達にとって、大切な体験を、大人が先に先に摘み取ってしまうということもあります。家庭で、小さな怪我を何も経験してこない子どもは、集団生活に入ったとたん、転び方、よけ方が判らず、大きな怪我をするということがあります。小さな怪我は大きな怪我を未然に防ぐ為には、必要な経験なのに、その経験がないから、大きな怪我に繋がっているのかもしれませんが。痛みを知らない子どもは、平気で、お友達をたたきます。だから、子ども達の将来を考えると必要な体験を大人が先に先に摘み取ってしまうことに危惧を感じます。

子どもにとって良かれと思ってしている大人の行為が子どもをひ弱で、ダメにしていくのかもしれませんが。今の子ども達には、その年齢に不可欠な体験が必要です。そのためにも、幼稚園では体験教育を大切に進めています。ご家庭でも、この夏休み、共に体を動かす事から始めてください。草取りでも、雑巾がけでも、何でもいいと思います。親子で共にすることに意味があるのです。だからこそ、夏休みが必要なのだと思います。ここに又、幼稚園の存在意義もあると私は考えます。最終的に子どもの心をつかめるのは親子の姿からだけなのです。

次に、子どもが育つのに、何が大切かという、自分の人生に対して自信を持つという事です。どんな子どもにも、この世の中に生きている価値があります。親が子どもを愛するという事は他人はどうであれ、親は我が子には「だいすきだよ」等と言い続けて、生きる価値を認めることです。そうすると、子どもは、自分に自信を持って生きていく事が出来ます。自分の生きる存在が認められた時に、初めて人も認められるのです。

又、今の若い学生の傾向を見ると、対面の会話より、携帯電話の方が長時間表情豊かにしゃべっているという現実があります。これは、携帯電話やメールの方が、気が楽だからでしょう。

現代は、子どもの数も減ってきて、一人、一室の時代になり、自己中心の生活で、多人数と生活していないから、人と長時間向き合う事が苦痛になってきているのです。それが、学級崩壊の原因の一つでもあります。人間関係が作れなくなってきている傾向にあります。地域社会も人間関係の絆が徐々に崩壊しつつあります。大人はもう一度、子どもの為だけではなく、人間として生きた関係を回復する為に、再び人間関係を構築しないと子どもの人間関係は豊かになることはありません。地域社会、学校、会社、大人の人間関係が希薄になってきていることをまず、自覚する必要があると思います。

今までの文化をもう一度見直す時期にきていると思います。そして、この課題は、子どもをとりまく、全ての人が手を繋いで協力してやらないと難しい問題だともいえます。

文部科学省の調査結果を見ながらどうか、これからも、この課題に関心を持ち続けてほしいと願っています。